

《知らないことを知らないという勇氣》

今から数年前—。
私が、テレビ番組制作の仕事をしているとき、
知らないことを『知らない』と、
言いにくくなってしまった時期があった。

何年も同じところで仕事をしていれば
当然、後輩という存在もでき、
番組内での自分の立ち位置もある。

その当時、
《知らないことは無知で恥ずかしいこと》
と強く思い込んでいたので、
何か知らないことが出てくると、
「勉強不足。。。こんなことも
知らないなんて、ダメで無知なヤツ！」
と、その都度、自分を責め立てていた。

そのときの感情を感じるのがイヤで、
知っているフリをしたくなったことも、数知れず。。。。

誰に対しても何も考えずに、
知らないことについては
『それ、知りません』
と、ひとこと言えれば楽なのに、
それを言うことで
「そんなことも知らないの？」
と言われてしまうことが、
私にとっては、
とにかくとても恐怖で悲しいことだったのだ。

なぜ、こんなに言い出しにくいのかと
心の中を見てみると、

『バカにされたくない』
『頼りにされたい』
『出来ないヤツだと思われたくない・・・』

という感情があることに気づいた。

そして、そう思われぬように、
必死に自分を守っていたのだ。

そんな想いを抱えている当時、
本を見ると買わずにはいられないほどで、
一時期、あり得ない量の本を所有していた。

“無知なことは恥ずかしい”
“なんでも知ってなければならぬ”
という強迫観念にも似た不安を、
少しでも埋めようと必死だったのだ。

出来れば すべてを知り尽くして、
「知らない」ことを
この世から なくしてしまいたかった。。。。

とにかく
『それ、知りません』
のひとことをいうのが
とても憚（はばから）れ、
新しい番組を担当することになると、
スタッフもほとんど変わるので、
「私は、当然知ってるべきことを、
把握できているだろうか」
「なにか聴かれたときに、
キチンと的確に答えられるだろうか」

・・・そう考えるだけで、気が重くなっていた。

しかし、その後—。

番組のスタッフのひとりが、
知らないことを「知らない」と言わなかった為に
ちょっとした事件が起きたり、
場面は違えど、
自分を投影しているかのような人物が現れ、
同じようなことで振り回されたり・・・と、
様々な経験をしていくうちに、
“潔く、知らないことは知らないと

どンドン言っていこう！”
と、心に誓った日があった。

それからは、
意識も変わっていったように記憶している。

実際、いろんな部署や現場で
「それ、知らないので教えてください」
と、言ってみると、
「そんなことも知らないの？」
と、言われることは、ほとんどなかった。

むしろ、丁寧に色んなことを教えてもらえたり、
同じ番組の中だけでなく、
様々な部署や場面で
助けてもらえることも増えていったのである。

そのころには、以前より、
ずっと仕事が楽しくなっていた。

優秀な方々の中で働くということは、
もちろん努力も必要だが、

“私が背伸びしても、たかが知れている”

・・・なんて 気づいたのもこの頃。

更に、
《どう思われても良い》
と、そんな割りきりのような気持ちが出てきて、
自分なりに、仕事の取り組み方を変え、
それに比例するかのように
状況も良い方向へと変わっていった。

この経験の中で得たことは、
私にとっては、大きかったように思う。

《自分の中だけで、
勝手に恐怖をつくり、不安になっていること》

これは、きっと探せば、
この他にも、いろいろとあるだろう。。
それらを見つけたら、
その都度、手放していこうと 思っている。

知らないことを「知らない」と言える勇氣—。
これは、いつのときでも持ち合わせていたい・・・

そう思う。

(2015. 8. 12 橘美羽)

